

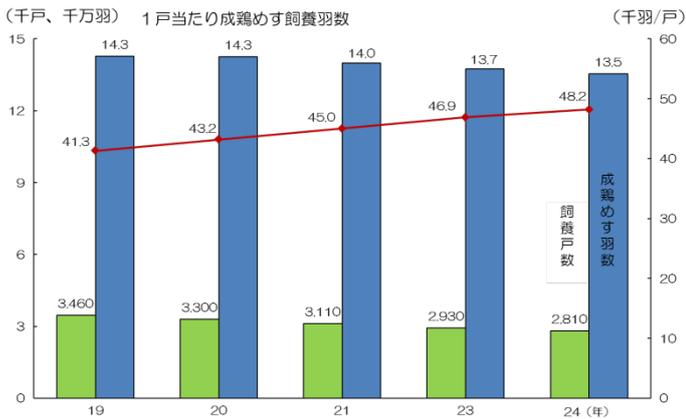
鶏卵



◆飼養動向

24年2月の採卵鶏の飼養羽数、1.4%減少

図1 採卵鶏の飼養戸数、成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」

注1：数値は各年の2月1日現在

2：成鶏めすとは種鶏を除く6カ月以上のめすをいう。

3：飼養戸数は、種鶏およびひな(6カ月未満)のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽数未満の飼養者を除く。

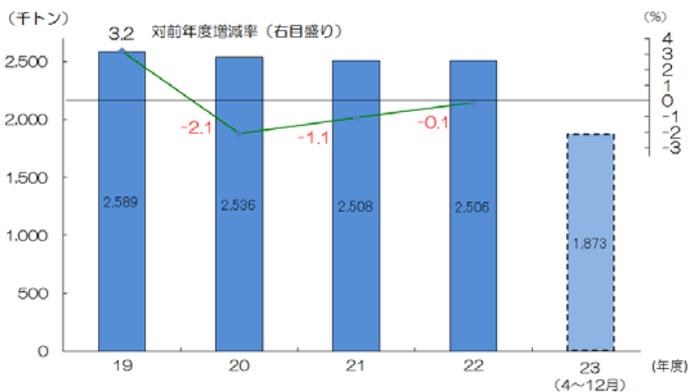
4：22年は世界農林業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

24年2月現在の採卵鶏の飼養戸数は、2,810戸(▲4.1%)となり、120戸減少した。また、成鶏めす飼養羽数は、1億3500万羽(▲1.4%)となった。飼養規模別に見ると、1万羽未満の階層でかなりの程度減少(▲8.3%)した一方、5万羽以上10万羽未満の戸数はやや増加(3.3%)した。1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は4万8200羽(2.8%)と、約1,300羽増加した(図1)。

◆生産

23年度の生産量、1.2%減少

図2 鶏卵の生産量



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：24年1月以降のデータは未公表

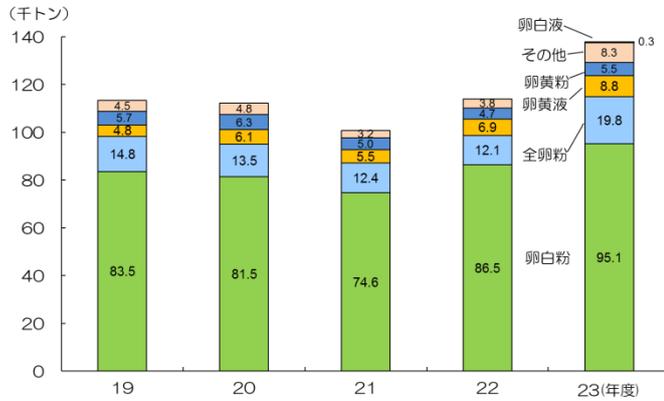
生産量は、17年度は国内での鳥インフルエンザ発生により落ち込んだが、19年度は大幅に回復し、平成元年度以降では平成5年度に次いで多い、258万9000トン(3.2%)であった。しかし、20年度はひな餌付け羽数の減少などから253万6000トン(▲2.1%)と減少した。また、21年度も250万8000トン(▲1.1%)と減少したが、22年度は250万6000トンと、前年並みであった。

23年度(4~12月)は、23年1月から3月にかけて発生した鳥インフルエンザにより約184万羽が処分対象となったことや、年度当初に、東日本大震災発生に伴う飼料供給の遅滞に対応するため早期淘汰が行われたことなどが要因となり、187万3000トン(▲1.2%)と、わずかに減少した(図2)。

◆輸入

23年度の輸入量、20.9%増加

図3 鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース

鶏卵の輸入量(殻付き換算ベース)は通常、国内需要量の3~5%程度を占めるが、国内の生産量、価格動向、為替相場などの影響を受けて変動する。

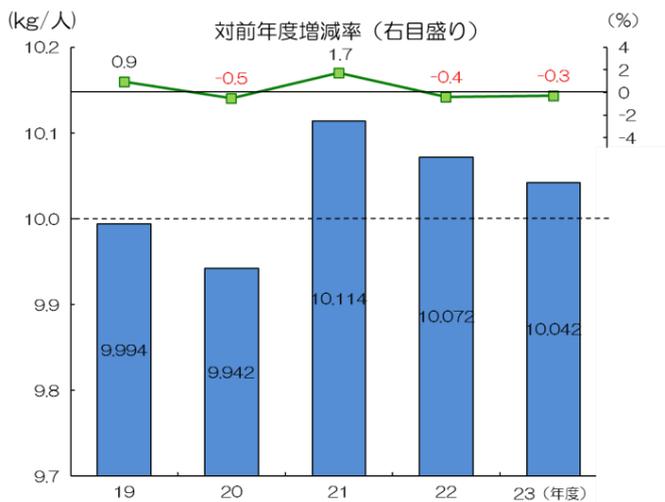
22年度は卸売価格が前年より上昇したことなどから輸入品に需要がシフトし、11万4000トン(13.1%)とかなり大きく増加した。

さらに、23年度は、東日本大震災後の国産品不足に対応するため、加工メーカーなどが輸入品による手当を行ったことから、13万8000トン(20.9%)と、大幅に増加した。(図3)。なお、主な輸入相手国は米国、オランダ、イタリア、中国であった。

◆消費

23年度の1人当たり家計消費量、0.3%減少

図4 鶏卵の家計消費量(1人当たり)



資料：総務省「家計調査報告」

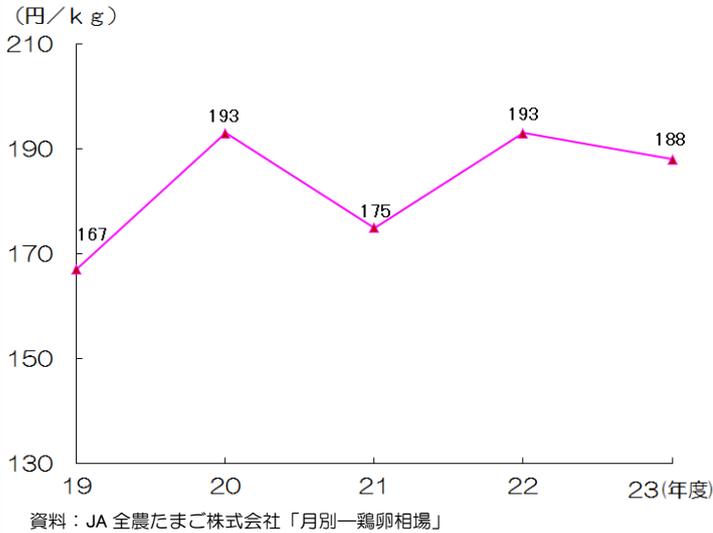
21年度における家計消費量は、卵価が前年を下回ったことや、厳しい経済情勢の下、より安価な畜産物への需要が高まったことにより、1人当たり10.114キログラム(1.7%)と増加したが、22年度は、卵価上昇のため、同10.072キログラム(▲0.4%)とわずかに減少した。

また、23年度も、同10.042キログラム(▲0.3%)と、2年連続で減少したものの、3年連続で同10キログラムを超える水準を維持している(図4)。

◆卸売価格

23年度の卸売価格、2.6%下回る

図5 鶏卵の卸売価格(東京全農系M)



21年度の鶏卵卸売価格(東京全農系M)は、21年1月の価格の落ち込みが大きく、4月以降も前年並みの価格水準まで回復させるほどの強い需要がみられなかったことから、キログラム当たり175円(▲9.3%)と、前年をかなりの程度下回った。

22年度は、前年の卵価低下を踏まえ、需要に応じた生産が行われたことなどから、前年をかなりの程度上回る同193円(10.3%)となった。

23年度は、23年1月から3月にかけて鳥インフルエンザが発生したことや、東日本大震災発生直後の4、5月に飼料不足に対応するため早期淘汰が行われたことから、需給が逼迫し、卸売価格が大幅に上昇したが、その後は輸入卵の増加により需給が緩み、低調に推移したため、同188円(▲2.6%)と前年をわずかに下回った(図5)。